

「甘え」と愛着（アタッチメント）

玉瀬耕治・今村友美*
(奈良教育大学心理学教室)

Amae and Attachment

Koji TAMASE and Tomomi IMAMURA
(Department of Psychology, Nara University of Education)

Abstract : The concept of Doi's *amae* and that of Bowlby's attachment are quite similar as both are representative of an emotional relationship between a person and his or her significant other. The purpose of this study was to explore the relationships among factors in an *amae* scale (Tamase & Aihara, 2004) and factors in an internal working model (IWM) scale (Toda, 1988). A hundred and fifty-three undergraduates served as the rater for rating their states of *amae* and attachment. The multiple regression analyses revealed that the interdependent *amae* could be explained by the secure type ($\beta = .25$), the ambivalent type ($\beta = .21$), and the avoidant type ($\beta = -.22$) of IWM, and that the distorted *amae* could be explained by the secure type ($\beta = .19$), the ambivalent type ($\beta = .32$), and the avoidant type ($\beta = .16$). These results were discussed in line with the *amae* and attachment theories.

Key Words : *amae*, attachment, internal working model

キーワード : 甘え、愛着（アタッチメント）
内的作業モデル（IWM）

1. 問題と目的

土居（1971, 2001）は日本人の対人関係のあり方として「甘え」の問題を提起した。「甘え」の問題については、発達心理学的意味、臨床心理学的意味、社会心理学的意味、文化心理学的意味など、さまざまな立場から論じることができる。そのいずれの分野の問題として論じるにしても、論拠として、まずはいかなる実態があるのかを把握することが必要であろう。本稿では、いかに実証的に甘えの問題を捉えることができるのかという視点で論を進めていく。

土居（2001）のいう「甘え」には2種類の甘えが想定されている。1つは「健康で素直な甘え」であり、これは発達心理学的に肯定的な意味をもつものである。甘えは発達の初期において必要不可欠なものであり、甘えを通して人との信頼関係を築いていくことができる。甘えは一般的には否定的に捉えられがちであ

るが、必要な時に甘えることができるという感覚をもてることは健康な心の発達にとって必要なものとみなされる。もう1つは「屈折した甘え」であり、これは臨床心理学的に重要な意味をもつものである。森田療法（森田, 1960）における「とらわれ」の概念については「屈折した甘え」に関連するものとして土居（1971）がこの理論を提唱した当初から論じている。甘えたくても甘えられない状況において、とらわれの心理が発生し、「すねる」、「うらむ」、「ひがむ」などの歪んだ形での甘えが形成されと考えられる。

玉瀬・相原（2004）は、「甘え」に関する従来の実証的研究を概観した上で、これまでにない視点として、土居（2001）のいう「健康で素直な甘え」と「屈折した甘え」を同時に捉えることができる多元的「甘え」尺度を試作した。この尺度は甘え希求、甘え受容、甘え歪曲、甘え拒絶の4つの因子によって構成されているが、甘え希求と甘え受容を合わせたものを土居（2001）の「素直な甘え」に相当する「相互依存的甘え」とし、甘え歪曲と甘え拒絶を合わせたものを土居（2001）に合わせて「屈折した甘え」と命名した。「相

* 現在 天理市教育総合センター

互依存的甘え」は自分が甘えたいときには甘え、相手からも必要なときには自分に甘えてほしいとする欲求である。これは健全で円滑な人間関係を築く上で必要不可欠なものであり、他者への信頼や思いやりと正の相関があることが分かっている（玉瀬・相原，2005）。一方、「屈折した甘え」は本来あるはずの素直な甘えが発達途上のどこかで阻害され、屈折せざるをえなくなったものと想定される。この尺度は人間関係における不信や自己愛としての自己中心の主体性と正の相関があることが分かっている（玉瀬・相原，2005）。

ところで、「甘え」ときわめて関連の深い概念として愛着（アタッチメント）を取り上げることができる。甘えと愛着の関係については土居も随所で論じているが（土居，2000，p.164；2001，p.83-84.）、両者の関係を直接扱った実証的研究は内田（1998）の「気がね」に関する研究の中でのものでない。愛着という概念はBowlby（1969）によって提唱されたものであり、個人と特定の他者との間に形成される心理的な絆を意味している。それは時間と空間をこえてかなり永続性のあるものと仮定されている。

愛着研究はAinsworth, Blehar, Waters & Wall（1978）のストレンジ・シチュエーション法（Strange Situation Procedure, 以下SSP）の開発によって飛躍的に発展した。それは実験室で母親と乳児を意図的に分離し再会させて、乳児がその際にどのような愛着行動を示すかを調べるものである。わが国においてもかなりの研究が行われている（氏家，1987；三宅，1990；1991）。この種の研究では、安定型、両価型、および回避型という3つの型の愛着行動が区別されている。安定型（B型）の子どもは初めての場所でも母親がいて安心し、活発に探索を行なう。母親がいなくなるとぐずったり泣いたりするが、母親が戻ると再び安心して探索を始める。回避型（A型）の子どもは母親との分離に際してほとんど泣いたり混乱したりすることがなく、母親と関わりなく行動し、母親の接近を回避したりする。両価型（C型）の子どもは母親との分離に強い不安や抵抗を示し、再会時には積極的に接触を求めが、なかなか機嫌が直らず抵抗を示す。これらは1歳時点での乳児の行動を調べたものであるが、愛着は乳幼児期のみでなく、成人した後でも形を変えて存続するとみなされている（Ainsworth, 1989）。

すなわち、愛着は発達とともに行動レベルでの近接から表象レベルでの近接へと徐々に移行し、安全基地としての養育者のイメージとして内在化される。そのような心的表象を「内的作業モデル」（Internal Working Model, IWM）という（Bowlby, 1969）。IWMとは、他者が自分の要求に対してどの程度応じてくれるのか、自分は他者からどの程度受け入れられているのかという自己と他者との応答の有効性に関す

る心的表象である（金政，2003；林，2001；山岸，1997）。

IWMの個人差については、Main, Kaplan & Cassidy（1985）が考案した成人愛着面接法（Adult Attachment Interview, 以下AAI）によって、乳幼児で見られた愛着の型に相当する愛着スタイルが成人後でも確認されている。IWMの実証的研究が進む中で、乳幼児期に肯定的なIWMを形成した子どもは、その後も安定した対人関係を築くことができるが、否定的なIWMを獲得した子どもは、成人後でも不安定な対人関係を示す傾向が認められている（遠藤，1992，Main et al, 1985；山岸，1997）。

これらのことは、先に述べた「甘え」と大いに関係があると考えられる。適切なIWMを形成している人は、健康で素直な甘えを持つ傾向があり、自分が甘えたいときや他者から甘えられたいときに素直にそれを表現できるようになるであろう。また、適切なIWMを形成していない人は甘えたくてもそれを素直に表現することができず、すねる、ひがむなどの屈折した甘えを示すようになるであろう。青年期における「甘え」と愛着の関係は必ずしも因果的に規定できるものではないが、本研究では愛着を起点にした場合に、どの程度甘えを予測しうるのかという視点で検討する。

2. 方 法

2. 2. 調査対象者

大学生153名（男子83名 女子70名）に、質問紙法による調査を実施した。平均年齢は19.9歳（SD=1.3）であった。

2. 3. 使用した尺度

2. 3. 1. 多面的「甘え」尺度

大学生の「甘え」を測定する尺度として、玉瀬・相原（2004）によって作成された多面的「甘え」尺度を用いた。この尺度は、「甘え希求」、「甘え受容」、「甘え歪曲」、および「甘え拒絶」の合計4つの因子から成っており、各因子5項目ずつ、合計20項目で構成されている。累積寄与率は45%で4因子としてまとまっており、各因子の α 係数は.72～.80の間である。「甘え希求」と「甘え受容」を合わせたものを「相互依存的甘え」（ $\alpha=.72$ ）と命名し、「甘え歪曲」と「甘え拒絶」を合わせたものを「屈折した甘え」（ $\alpha=.79$ ）と命名して、土居（2001）の「甘え」との関連づけができるようになっている。

本研究では、項目の表記をより自然なものにするために若干の修正を加えた全20項目を用いた（表1）。修正した点は6つの項目において「自分」を「私」と置き換えたことである。回答は「いつもそう思う」から「全くそう思わない」までの4段階評定である。

表1 本研究で用いた多元的「甘え」尺度

	項 目
希1	授業についていけないときは、誰かに助けを求めたい。
希2	勉強がうまくいかないときは、誰かを頼りにしたくなる。
希3	サークル活動がうまくいかないときは、誰かになんとかしてもらいたい。
希4	友達とけんかをしたときは、他の友達になんとかしてほしい。
希5	自分が何か新しいことを始めるときは、誰かに後押しをしてほしい。
受1	友達が将来どの職業につくべきか迷っているときは、私が相談にのってあげたい。
受2	身近な人の体調がすぐれないときは、私をあてにしてほしい。（*）
受3	友達が勉強で行き詰まっているときは、私が相談にのってあげたい。（*）
受4	友達の日常生活に張り合いがなさそうなときは、私が相談にのってあげたい。（*）
受5	親しい人が落ち込んでいるときは、私が慰めてあげたい。（*）
歪1	サークル活動がうまくいかないとき、リーダーが努力をしてくれないと腹が立つ。
歪2	身内にわがままをきいてもらえないと、ふてくされてしまう。
歪3	自分の要望が通らないときは、ついつい相手をうらむことがある。
歪4	親しい人が私の好意に応えてくれないと、すねてしまう。（*）
歪5	周りの人が私の努力を認めてくれないと、ふてくされてしまう。
拒1	他人には私の気持ちを察してほしいが、私はそうしたくない。（*）
拒2	勉強がうまくいかないときは誰かに助けてほしいが、私は誰かから助けを求められたくはない。
拒3	自分はある程度約束をすばかすことがあっても、他人にはそうされたくはない。
拒4	自分の考えは周りに受け入れてほしいが、周りの人の考えはあまり受け入れたいとは思わない。
拒5	他人にはきつい本音を言うことがあっても、他人からは本音を言われたくはない。

註1）希：希求、受：受容、歪：歪曲、拒：拒絶

註2）評定は “まったくそう思わない” から “いつもそう思う” までの4件法

註3）項目の順序は入れ替えて実施した。

註4）（*）は玉瀬・相原（2004）の項目における「自分」を「私」に変えたもの。

2. 3. 2. 内的作業モデル尺度

本研究では、大学生の愛着を測る尺度として戸田（1988）によって作成された内的作業モデル尺度を用いた。この尺度は、安定型（他者に対して信頼感を持っており、安心して接することができる）、回避型（他者に対して不信感を抱いている）、両価型（他者に対して信頼と不信という2つの相反する感情をもっている）の計3尺度から成っており、各6項目ずつ、合計18項目で構成されている。この尺度はHazan & Shaver（1987）の成人用愛着スタイル尺度（単一項目強制選択方式）を参考にして各スタイル（型）の特徴を複数の項目に作り直したものである。回避尺度の α 係数が.60～.68とやや低めではあるが、その他の尺度では.73～.86で信頼性は得られている。本研究では大学生を対象に研究を行うことや、個人がもつ対人関係の枠組みとしてのIWMを測定すること、先行研究でも多く用いられていることから、この尺度の全18項目を用いることにした。回答は「非常によくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの6段階評定である。

2. 4. 手続き

上記の2つの尺度を含む質問紙を、平成16年8月に第2著者および別の大学に所属する知人が小集団ごとに実施した。実施に際しては、調査は大学生の意識調査の一環として行うものであり結果は統計的に処理すること、個人の情報は外部にもらさないことなどを伝えて協力を得た。

3. 結 果

多元的「甘え」尺度では各項目に「全くそう思わない」（1点）から「いつもそう思う」（4点）、内的作業モデル尺度では各項目に「全くあてはまらない」（1点）から「非常によくあてはまる」（6点）までの得点を与えて集計した。

3. 1. データの整合性

データの信頼性を確認するため、それぞれの尺度の因子ごとに α 係数を算出した。その結果、多元的「甘え」尺度では「甘え希求」で $\alpha = .60$ 、「甘え受容」で $\alpha = .75$ 、「甘え歪曲」で $\alpha = .69$ 、「甘え拒絶」で

$\alpha = .67$ であった。また、IWM尺度では「安定」で $\alpha = .87$ 、「両価」で $\alpha = .79$ 、「回避」で $\alpha = .69$ であった。「甘え希求」の α 係数がかなり低いが、「甘え希求」と「甘え受容」を合わせた「相互依存的甘え」では $\alpha = .69$ 、「甘え歪曲」と「甘え拒絶」を合わせた「屈折した甘え」では $\alpha = .77$ であったので、許容される水準であるとみなした。

3. 2. 各尺度間の関係

表2は2つの尺度の下位尺度ごとの男女別平均と標準偏差 (SD) を示したものである。男女間で差の検定を行ったところ、「甘え拒絶」においてのみ有意な性差が認められた ($t = 2.38, p < .05$)。この尺度では男子の方が女子よりも得点が高いといえる。この表には先行研究 (玉瀬・相原, 2004) の結果についても表示した。表3は多元的「甘え」尺度と内的作業モデル尺度における各下位尺度間の相関関係を示したものである。この表で明らかなように、「甘え希求」と「両価」、「甘え受容」と「安定」、「甘え歪曲」と「両価」、「甘え拒絶」と「両価」および「回避」の間では正の有意な相関が認められ、「甘え受容」と「回避」の間では負の有意な相関が認められる。

表4は甘えの2つの下位尺度ごとに合わせた「相互依存的甘え」と「屈折した甘え」について、全体 (表4-1) および男女別 (表4-2、表4-3) に愛着との相関を求めたものである。これらの表で明らかなように、「相互依存的甘え」と「屈折した甘え」の相関は女子では有意でなく、男子では有意になっている。また、愛着の下位尺度に関して、「安定」と「回避」の間で男子では有意な負の相関が認められるが、女子では相関は有意ではない。

表5は「相互依存的甘え」と「屈折した甘え」をそれぞれ目的変数とし、愛着の3つの下位尺度を説明変数とする重回帰分析を行った結果を示したものである。この表から、愛着の3つの下位尺度はいずれも甘えを説明するのに寄与していることが分かる。「相互依存的甘え」に関しては「安定」と「両価」が正の有意な標準偏回帰係数を示し、「回避」は負の値を示している。有意水準を考慮すれば「安定」「回避」がより重要な役割を果たしているといえる。「屈折した甘え」についても愛着の3つの下位尺度はすべて有意な標準偏回帰係数を示している。有意水準を考慮すれば「両価」がもっとも大きく寄与しているといえる。

4. 議 論

4. 1. 各尺度間の関係について

表2で明らかなように、本研究ではほとんど男女差は認められていない。わずかに「甘え拒絶」において男子の方が女子よりも有意に高くなっているのみであ

る。この尺度では、他の3つの尺度に比べて低めの得点になっているが、玉瀬・相原 (2004) の「甘え拒絶」と比べると、本研究の男子の値はやや高いといえるかもしれない。この点については、さらにデータ数を増やして検討する必要があるだろう。「甘え」の下位尺度間の相関については表3に示されている。この表で明らかなように、「甘え受容」と「甘え歪曲」の相関を除く全ての相関が有意であった。これは先行研究 (玉瀬・相原, 2004) の結果とほぼ同じである。表3の下欄に「甘え」と「愛着」の各下位尺度間の相関が示されている。「甘え希求」と「両価」、「甘え受容」と「安定」、「甘え歪曲」と「両価」、「甘え拒絶」と「両価」および「回避」の間では正の有意な相関が認められ、「甘え受容」と「回避」の間では負の有意な相関が認められている。これらの結果は、希求と受容、歪曲と拒絶が愛着とそれぞれ異なる関係を有していることを示唆している。希求は「自ら求める甘え」であり、受容は「相手からの甘えを受け入れようとするもの」である。本結果からすれば、「安定」は自ら求める甘えよりも、むしろ相手からの甘えを受け入れようとする欲求と深く関連していることが分かる。また、「両価」は歪曲、拒絶の両方と正の相関があるので、土居のいう不健康な甘えと関連していることが分かる。「回避」の傾向が高い人は相手からの甘えを受け入れることが困難で、むしろ甘えを拒絶する傾向があるといえる。このような個々の下位尺度ごとの関連性は、やや複雑であるので、希求と受容、歪曲と拒絶を合わせた甘え、すなわち「相互依存的甘え」と「屈折した甘え」と「愛着」の関係についてさらに見ていくことにする。その方が土居の甘えの概念との対応を考えやすいともいえる。

表4-1から表4-3の結果は、甘えと愛着の関係を明確に示している。すなわち、「安定」は「相互依存的甘え」と正の相関があり、「両価」は「屈折した甘え」と正の相関があり、「回避」は「相互依存的甘え」と負の相関がある。当初に想定したように、愛着を起点として考えると「安定」した対人関係を有する人ほど「相互依存的甘え」を示しやすく、逆に「回避」的な対人関係を有する人ほど「相互依存的甘え」を示しにくいと考えられる。また、「両価」的な対人関係を有する人は、「屈折した甘え」を示しやすい傾向があるといえる。愛着の内部相関を見ると、両価と回避がともに安定と負の有意な相関があり、前2者がより近い関係にあるとみることもできる (以上は表4-1)。男子と女子を別々に分析してみても (表4-2と表4-3)、ほぼ同じ結果が示されている。以上のことは、あくまでも相関係数に基づく推測であるが、次に重回帰分析によってどの程度因果的な説明が可能であるのかを見ていくことにする。

表5は、愛着と「甘え」の因果的關係を重回帰分析

表2 下位尺度ごとの男女別平均とSD (N=153)

		希求	受容	歪曲	拒絶	相互依存	屈折	安定	両価	回避
男	平均	13.70	14.02	12.01	9.69	27.72	21.70	21.77	21.66	18.46
	SD	2.58	2.61	2.84	2.63	3.97	4.79	6.04	5.11	5.14
女	平均	13.46	14.43	11.83	8.69	27.89	20.51	20.73	21.87	18.43
	SD	2.43	2.73	2.61	2.55	4.08	4.36	5.16	5.66	4.48
全体	平均	13.59	14.21	11.93	9.23	27.80	21.16	21.29	21.76	18.44
	SD	2.51	2.66	2.73	2.63	4.01	4.62	5.66	5.35	4.84
性差					*					
a	平均	13.42	14.98	11.58	8.54	28.40	20.12			
	SD	2.87	2.41	2.97	2.54	4.05	4.41			

男子：N=83, 女子：N=70

* $p < .05$

a：玉瀬・相原（2004）

表3 「甘え」と愛着の関係 (N=153)

	甘え								愛着		
	希求		受容		歪曲		拒絶		安定	両価	回避
希求	1										
受容	0.20 *		1								
歪曲	0.38 **		0.08		1						
拒絶	0.45 **		-0.31 **		0.48 **		1				
安定	0.03		0.35 **		0.1		-0.04		1		
両価	0.26 **		-0.08		0.24 **		0.22 **		-0.34 **	1	
回避	-0.16		-0.27 **		-0.02		0.24 **		-0.30 **	0.06	1

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 4-1 2種類の「甘え」と愛着の相関(全体)

	相互依存	屈折	安定	両価	回避
相互依存	1.00				
屈折	0.22 **	1.00			
安定	0.25 **	0.04	1.00		
両価	0.11	0.27 **	-0.34 **	1.00	
回避	-0.28 **	0.12	-0.30 **	0.06	1.00

** $p < .01$

表 4-2 2種類の「甘え」と愛着の相関(男子)

	相互依存	屈折	安定	両価	回避
相互依存	1.00				
屈折	0.32 **	1.00			
安定	0.24 *	0.03	1.00		
両価	0.09	0.22 *	-0.28 *	1.00	
回避	-0.26 *	0.21	-0.42 **	0.06	1.00

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 4-3 2 種類の「甘え」と愛着の相関(女子)

	相互依存	屈折	安定	両価	回避
相互依存	1.00				
屈折	0.10	1.00			
安定	0.27 *	0.03	1.00		
両価	0.12	0.33 **	-0.41 **	1.00	
回避	-0.30 *	0.00	-0.11	0.05	1.00

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 5 「甘え」2要因を目的変数とする重回帰分析

説明変数	相互依存的甘え			屈折した甘え		
	β	t 値		β	t 値	
安定	0.25	3.02	**	0.19	2.27	*
両価	0.21	2.55	*	0.32	3.95	**
回避	-0.22	2.73	**	0.16	2.02	*
決定係数		0.14			0.11	
修正済決定係数		0.13			0.10	
重相関係数		0.38			0.34	
F 値		8.54**			6.38**	

* $p < .05$, ** $p < .01$

によって捉えたものである。この表から、愛着の3つの型はいずれも甘えの形成に影響しているが、「相互依存的甘え」については「安定」の影響が大きく($\beta = .25$)、「回避」は妨害的に作用しているといえる。「屈折した甘え」については「両価」の影響が大きい($\beta = .32$)といえる。

4. 2. 「甘え」と「愛着」の関係に関する発達臨床心理学的意味

土居 (1971, 2001) が提唱した甘えの概念は、臨床心理学の領域において、クライアントの心理状態を把握する際の有力な手がかりとなるものである(土居, 1992, 2000; 熊倉, 2002)。甘えの程度や甘えの示し方によって、カウンセラーはそのクライアントに適する対応の仕方を考えなければならない。甘えは健康な心の発達を促す上でなくてはならないものであり、甘えの体験を通して、対人関係のあり方を学ぶといえる。本研究で用いた多元的「甘え」尺度は、精神的健康に関わる基礎的研究の測定用具としてその有用性が示されつつある。この尺度における「相互依存的甘え」は「思いやり」(内田・北山, 2001) と正の相関があり、「屈折した甘え」は「自己愛」の下位尺度である「自己中心的主体性」と正の相関があることが分かっている(玉瀬・相原, 2005)。したがって、「相互依存的甘え」はより健康な人において見られる心理的傾向であり、「屈折した甘え」はより不健康な人に見られる心

理的傾向であるといえる。臨床的には、「甘え」はむやみに助長することが目標となるものではなく、「甘え」を体験することを通して自己の「甘え」に気づき、「甘え」を対象化していくことが目標となるべきものである。

一方、ボウルビイ (Bowlby, 1969) が提唱した愛着 (アタッチメント) も、対人関係の発達を問題にする際の重要な鍵概念として、乳幼児にとどまらず近年は青年や成人についても実証的な研究が盛んに行われつつある (Ainsworth, 1989; Bartholomew & Horowitz, 1991; 遠藤, 1992; 林, 2001; Hazan, & Shaver, 1987; 金政, 2003, 2005; 数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000; Kirkpatrick, & Davis, 1994; 久保, 2000; 中尾・加藤, 2003, 2004; 戸田, 1991; 山岸, 1997)。土居は随所で「甘え」と愛着の関係について取り上げているが(土居, 2000, 2001; 土居・ルイス・須賀・松田, 2005)、実証的証拠を示しているわけではない。本研究では、愛着関係のあり方によってどのような甘えが形成されているのかという視点で分析を行った。内田 (1998) は、「気がね」尺度を作成にした際に、同時に5つの下位尺度をもつ「甘え」尺度を作成し、さらに愛着の型を表わす内的作業モデル(訥摩・戸田, 1988) も測定して、それらの関連性を調べている。その結果、IWMの安定型は「直接的甘え」と正の相関、「とらわれ的甘え」と負の相関が示されている。両価型は「屈折的甘え」「依存的甘え」「とらわれ的甘え」

「直接的甘え」と正の相関が示されている。回避型は「直接的甘え」と負の相関が示されている。これらの結果は尺度の内容が異なるので直接的には比較できないが、本研究と類似した結果であるといっていだろ。安定型と回避型についてはほぼ同じ結果であり、両極型に関しても、4つの下位尺度の水準で本研究の結果と対応づけてみると、希求、歪曲、拒絶の3尺度と正の相関が見られる点など、かなり類似しているといえる。

家族との安定した愛着関係を基盤として、「甘え」たり「甘えられ」たりできる対人関係を形成し、社会的な関係を広げていくことは、将来健康な社会生活を営む上での重要な資質となる。土居他（2005）は、アメリカ人研究者（ルイス，C.）との対談を通して日本の初等教育の特異性を示唆している。そこではルイスが日本の初等教育は教師と子どもとの情緒的な結びつきを重視した極めて特異的で優れた教育であることを指摘している。日本人は日本の教育の優れた点に目を向けず、無条件に欧米の方式が優れているかのように捉えがちである。また、「学級づくり」に見られる擬似家族的な仲間づくりは、「甘え」の形成を促す優れた教育方法であるとも述べられている。これらの指摘は日本の初等教育の優れた点を見直す上で重要な示唆を与えていると思われる。本研究では「甘え」と愛着の間に了解しうる一定の関係があることが示唆されたが、これらの心理的特質をさらに教育と関連づけていくことは意義深いことと考えられる。

5. 要 約

本研究では、「甘え」と愛着（アタッチメント）の関係について大学生を用いて実証的に検討することを目的とした。4つの下位尺度で構成される多元的「甘え」尺度（玉瀬・相原，2004）と3つの愛着の型を測定できる内的作業モデル尺度（戸田，1988）を用いた。その結果、愛着の安定型は「甘え希求」と「甘え受容」で構成される「相互依存的甘え」と正の相関があり、両極型は「甘え歪曲」と「甘え拒絶」で構成される「屈折した甘え」と正の相関があった。また、回避型は「相互依存的甘え」と負の相関があった。重回帰分析の結果、「相互依存的甘え」と「屈折した甘え」は愛着の型によってある程度説明しうるということが示された。これらの結果は、発達臨床心理学的に意義づけられ、教育との関連についても考察された。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S. (1989). Attachment beyond infancy. *American Psychologist*, 44, 709-716.
Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall,

- S. (1978). *Patterns of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation*. Hillsdale, N.Y.: Erlbaum.
Bartholomew, K., & Horowitz, L.M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss*, vol.1: *Attachment*. New York: Basic Books. (黒田実郎・大羽葵・岡田洋子訳 母子関係の理論Ⅰ－愛着行動 岩崎学術出版社 1976)
土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
土居健郎 (1992). 新訂 方法としての面接－臨床家のために 医学書院
土居健郎 (2000). 土居健郎選集 (2) 「甘え」理論の展開 岩波書店
土居健郎 (2001). 続「甘え」の構造 弘文堂
土居健郎・ルイス, C.C.・須賀由紀子・松田善幸 (2005). 甘えと教育と日本文化 PHP研究所
遠藤利彦 (1992). 愛着と表象－愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観－ 心理学評論, 35, 201-233.
林もも子 (2001). 成人のアタッチメント－概観と臨床心理学的考察 立教大学コミュニティ福祉学部紀要 3, 35-49.
Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
Kirkpatrick, L.A., & Davis, K.E. (1994). Attachment style, gender, and relationship stability: A longitudinal analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 502-512.
金政祐司 (2003). 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望－現在、成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは－ 対人社会心理学研究 第3号
金政祐司 (2005). 自己と他者への信念や期待が表情の感情認知に及ぼす影響－成人の愛着的視点から－ 心理学研究 76, 359-367.
数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹 (2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究 48, 323-332.
久保恵 (2001). 愛着表象の投影法的研究－親子状況刺激画を用いて－ 心理学研究 70, 477-484.
熊倉伸宏 (2002). 面接法 新興医学出版社
Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104.
三宅和夫 (1990). 子どもの個性－生後2年間を中心

- に 東京大学出版会
- 三宅和夫（編）（1991）. 乳幼児の人格形成と母子関係 東京大学出版
- 森田正馬（1960）. 神経質の本態と療法－精神生活の開眼 白揚社
- 中尾達馬・加藤和生（2003）. 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか？－4 カテゴリー（強制選択式，多項目式）と3 カテゴリー（多項目式）との対応性－ 九州大学心理学研究 4, 57-66.
- 中尾達馬・加藤和生（2004）. 成人愛着スタイル尺度（ECR）の日本語版作成の試み 心理学研究 75, 154-159.
- 詫摩武俊・戸田弘二（1988）. 愛着理論からみた青年期の対人態度：成人版愛着スタイル尺度作成の試み 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 玉瀬耕治・相原和雄（2004）. 大学生の「甘え」と特性5因子の関係 奈良教育大学実践総合センター研究紀要 13, 23-31.
- 玉瀬耕治・相原和雄（2005）. 相互依存的甘えと思いやり，屈折した甘えと自己愛的傾向 奈良教育大学紀要 54(1), 49-61.
- 戸田弘二（1991）. Internal Working Model研究の展望 北海道大学教育学部紀要 55, 133-143.
- 戸田弘二（1988）. 内的作業モデル尺度 堀洋道（監修）心理測定尺度集Ⅱ－人間と社会のつながりをとらえる（対人関係・価値観）サイエンス社 109-113.
- 内田亜紀子（1998）. 大学生の「気がね」に関する研究 群馬大学教育実践研究 15, 271-284.
- 内田由紀子・北山忍（2001）. 思いやり尺度の作成と妥当性の検討 心理学研究 74, 275-282.
- 氏家達夫（1987）. Strange Situationにおける愛着行動のパターンと分離前場面との関係について 心理学研究 58, 98-104.
- 山岸明子（1997）. 青年期後期から成人期初期の内的作業モデル：縦断的研究 発達心理学研究 8, 206-217